The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 田中一光《グラフィックアート植物園》 |
| Author(s) | 奥石, まおり |
| Citation | デザイン理論. 2016, 68, p. 80-81 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/57982 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 田中一光《グラフィックアート植物園》

輿石まおり／無所属

## はじめに

日本を代表する美術である琳派は私淑という独特の継承方法でも知られる。尾形光琳（1658-1716），田中一光（1930-2002）は共に琳派の継承者である。

本発表の目的は田中一光が琳派に私淑し継承したものは何であるか，田中一光のポスターがモチーフに関係なく日本らしさを感じさせる理由を明らかにすることである。

考察にあたって田中一光の言説が確認される尾形光琳《燕子花図屏風》（十八世紀，国宝，紙本金地著色，二曲一双，各106.0×172.0cm，根津美術館所蔵）と第50回田中一光展〔グラフィックアート植物園〕（ギンザ・グラフィック・ギャラリー，1990年４月４日－４月24日）出展作品であるグラフィックアート作品（1990，1030×728mm，オフセット）を取り上げた。

《燕子花図屏風》について本発表では菊岡沾涼（1687-1746）による光琳画評を取り上げ，それを引いた福井利吉郎（1886-1972）及び白崎秀雄（1920-1992）による見解に注目した。そこに田中一光の言説，尾形光琳と田中一光の共通項である能楽を合わせて検討することで尾形光琳，田中一光双方の日本らしさに係る特徴延いては共通点を考察した。

## １．尾形光琳《燕子花図屏風》

菊岡沾涼は『本朝世事談綺』（1734）で光琳画を「しやうじにうつるかげを見て，書きいだせしものなり。」[1] と述べた。『明治以前に於ける宗達光琳画の鑑賞㈠』（1916）において同記述が通説であることを看破した上で取り上げた福井利吉郎は，日本美術史研究の視点から光琳画の特徴を様式化及び平面的の二点に集約したが，その内容については示唆にとどまった。同じく同記述を取り上げた白崎秀雄は障子に映る影を平易に説明したが，光琳画の二点の特徴については立ち入らなかった。

人々が共通して受け取る印象は大まかであれ本質を捉えているものだ。そこで本発表ではこれら先行研究を踏まえ，菊岡の光琳画評が述べる障子に映る影にあらためて注目した。

影は実体に必ず付き添うものであり，様々なものを同列に置き同質化する。本発表では《燕子花図屏風》に二つの実体を指摘し，その影としての有様，様式化及び平面的の内容を考察することで日本らしさを感じさせる要点を明らかとした。

### A. 燕 子 花

《燕子花図屏風》は実際の生き生きとした燕子花の様子をとらえている作品だが群生する燕子花を忠実に写生し再現した作品ではない。尾形光琳は燕子花群という原風景を描いたのだが単に写生的に描いたのではなく，その最大公約数のイメージを典型化（旧称：便化）によって描き出したのだ。

《燕子花図屏風》の第一の実体は日本固有の自然，気候風土と地理的条件下に生育する燕子花であり，典型化が表現に用いられたのだ。

### B. 『伊勢物語』『杜若』

《燕子花図屏風》のもう一つの実体は日本の古典文学・古典芸能である『伊勢物語』，『杜若』である。

《燕子花図屏風》は『伊勢物語』『杜若』

という実体がありながら装飾模様のように主題の中心が定まらない。その要因は原風景としての燕子花と『伊勢物語』『杜若』という二種類の実体が典型化により燕子花という同形を取り，更に影として同質化されたことにある。その結果，主題つまりは創作活動の動機となるもの，作家の主張，事柄の中心が曖昧模糊となったのだ。

主題の中心が定まらず，作品がそれ自体ではなく文化的共同性を前提に成り立つ有り方，更に言えば，主題を二義的に扱い第一義に造形に趣向を凝らす有様は日本の伝統文化・伝統芸術の特性として指摘されてきた。この特性が生む効果は，世阿弥が『風姿花伝』で述べる花の観者に与える効果に相当する，高尚であれ卑俗であれ観者の様々な関心に応え何時誰が見ても面白さを感じる，作品鑑賞に幅と深みをもたらすことだ。

影と実体の関係を基盤とする《燕子花図屏風》は，尾形光琳の典型化，同質化を含めた造形上の創意工夫と相まって，世阿弥の述べる花を体現する作品となったのだ。

## 2．田中一光《グラフィックアート植物園》

### A. 花という主題

花とグラフィックデザインとの共通点を挙げる田中一光は「モチーフそれ自体はさほど大事ではない」[2] と述べた上で，観者に対する効果として，グラフィックデザインは何をおいてもまず美しく独創的でなければ始まらないと言挙した。

世阿弥，田中一光共に身近でごくありふれた，趣向がなければ日常に埋没したままとなるものの例えとして花を取り上げた。

第一に観者の視点に立ち見慣れた日常の諸々に趣向を凝らす田中一光の視点は，花を観者に与える効果として説明した世阿弥の視点と一致する。

### B. 見 立 て

環境が異なる尾形光琳と田中一光の時代では日本の伝統文化・伝統芸術という文化的共同性への依存度が異なる。《グラフィックアート植物園》には《燕子花図屏風》に指摘した影と実体の関係は見受けられない。

《グラフィックアート植物園》には見立てが用いられた。本歌取りと同様に見立ても日本の伝統文化・伝統芸術の特性の一つであり，観者の視点に立ち，見慣れた日常の諸々に趣向を凝らし，鑑賞に幅と深みをもたらす方法だ。また田中一光が視覚的な趣向を凝らすヒントを日本の伝統文化・伝統芸術に係る造形に求めたことは観者が日本らしさを感じる要因の一つとなったが，それは時代，国内外を問わず日本らしさを意図的に演出する際の常套手段であり，田中一光が琳派に私淑した手法とはいえない。

## おわりに

《燕子花図屏風》と《グラフィックアート植物園》の日本らしさを感じさせる共通点は，主題を二義的に扱い，造形において観者の様々な視点を強く意識し，見慣れた日常の諸々に趣向を凝らすこと，そして高尚であれ卑俗であれ観者の様々な関心に応え，何時誰が見ても面白さを感じる結果を得ること，つまりは世阿弥の述べる花を第一義に求めたことだ。

田中一光が琳派に私淑し継承したものの一つは，世阿弥の述べる花を求める視点であり，それが日本らしさを感じさせる要点の一つなのだ。

**註**

1　菊岡沾涼「本朝世事談綺」日本随筆大成編輯部（編）『日本随筆大成　第２期　第12巻』吉川弘文堂 1994年11月１日 p. 522

2　田中一光「グラフィックと花の色いろ」『デザインの前後左右』白水社　1995年３月10日 p. 80